

新害虫チュウゴクアミガサハゴロモとは (発生消長と薬剤感受性の検討)

茶業技術研究担当 ○宮田穂波、梅本藤男
農業革新支援担当 小俣良介

1 ねらい

2024年10月以降、徒長した秋芽に白色綿状の物質が付着しているのが茶園で目立ち（図1）、のちにチュウゴクアミガサハゴロモによる産卵痕であることが明らかとなった。チュウゴクアミガサハゴロモとは、カメムシ目の一科であり、在来種アミガサハゴロモに類似した外来種である。

成虫・幼虫ともに果樹や花き、針葉樹など、多様な植物種へ寄生または産卵することが確認されており（図2、3）、国内では28都府県より農作物への被害が報告されている（2026年1月現在）。



図1．産卵中の成虫



図2．幼虫



図3．茎内の卵

また茶産地でも全国的に発生が確認されており、「チャの新害虫」として生産者より認識され始めている害虫である。一方で、ここ数年で発生が確認され、分布を拡大している害虫であるため、茶園における発生時期が不明であり、また登録農薬が無い（2026年1月現在）点が課題である。

そこで、防除方法を検討するための基礎知見として、茶園における発生消長及び既存薬剤に対する感受性について調査を実施した。

2 研究内容

（1）発生消長調査

チュウゴクアミガサハゴロモの成虫の発生時期を検討するため、茶業研究所内に設置した予察灯を用いて調査を実施した。調査時期は2024年6月～11月、2025年4月～11月であり、期間内に1日ごと捕獲した成虫の数を計測し、5日間の移動平均数を求めた。

（2）薬剤感受性試験

茶に登録のある既存の殺虫剤（表1）を用いて、若齢幼虫を対象とした試験を実施した。試験は、所内茶園より採集した健全な切り枝（15cm程度の裾枝）を使用し、薬剤はハンドスプレーを用いて十分量散布した。薬剤が乾いたことを確認し、その後幼虫を供給して感受性を評価した。

虫を1区あたり10頭放虫した。散布3日後及び5日後に幼虫の死亡数を調査し、補正死亡率を算出して薬剤感受性を検討した。

表1. 試験に使用した既存の殺虫剤一覧

農薬の種類 (成分名のみ抜粋)	農薬の名称	希釀 倍数	茶で既に登録のある害虫 (カメムシ目害虫のみ抜粋)
クロチアニジン	ダントツ水溶剤	2000	チャトゲコナジラミ、チャノミドリヒメヨコバイ、 ジマグロアオカスミカメ、コミカンアブラムシ
エチプロール	キラップフロアブル	2000	ジマグロアオカスミカメ
アバメクチン	アグリメック	1000	チャトゲコナジラミ、チャノミドリヒメヨコバイ
フルフェノクスロン	カスケード乳剤	4000	チャトゲコナジラミ、チャノミドリヒメヨコバイ、 ジマグロアオカスミカメ
フロニカミド	ウララDF	2000	チャトゲコナジラミ、チャノミドリヒメヨコバイ、 ジマグロアオカスミカメ、コミカンアブラムシ

3 解明点および留意点

(1) 2024年7月中旬に初めて1頭誘殺され、その後9月中旬に発生ピークになり、10月末に終息した。2025年は6月下旬に初誘殺を確認し、7月下旬に発生ピークとなり、8月中旬に発生量が減少した。その後再び発生量が増加し、9月中旬に発生ピークとなり、11月末まで発生が確認された。またアオバハゴロモと比較すると、チュウゴクアミガサハゴロモは発生期間が長いことが明らかとなった。

これらの結果より、チュウゴクアミガサハゴロモの成虫は年2回、ピークが確認され、年2世代発生していることが示唆された。

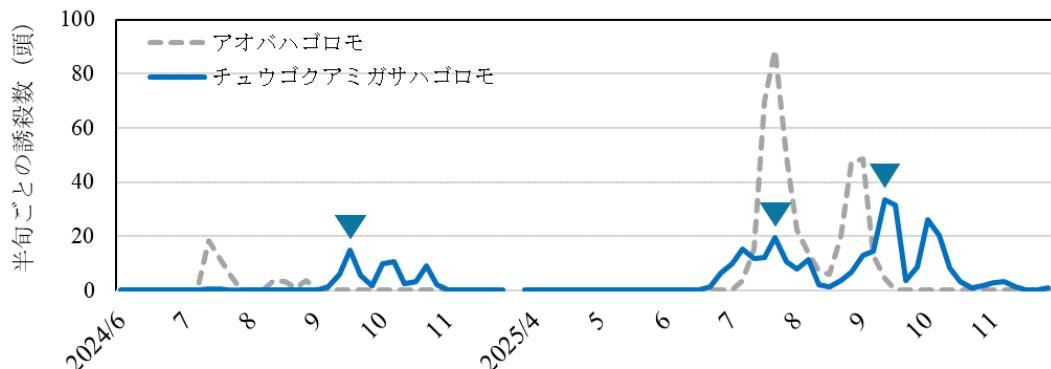


図4. 半旬ごとの誘殺数(頭) (▼は発生のピークを示す)

(2) クロチアニジン水溶剤(ダントツ水溶剤)、エチプロール水和剤(キラップフロアブル)及びアバメクチン乳剤(アグリメック)の3剤は、散布3日後には95%以上の補正死亡率であり、高い効果が認められた。またフルフェノクスロン乳剤(カスケード乳剤)、フロニカミド水和剤(ウララDF)では、散布5日後に70%を超える補正死亡率であったことから、十分な効果が認められた。

※今回試験に使用した5剤は、茶・チュウゴクアミガサハゴロモに登録はありません。よって本種を対象とした使用はできませんので、ご注意ください。